

令和4年度  
板橋区総合教育会議

令和4年9月8日

板橋区 総務課

令和4年度板橋区総合教育会議

日 時 令和4年9月8日(木)  
開 会 午前10時30分  
閉 会 午後0時5分  
場 所 板橋区役所南館6階 教育支援センター

出席者

坂本区長	坂本 健
教育長	中川 修一
教育長職務代理者	高野 佐紀子
教育委員	長沼 豊
教育委員	野田 義博

欠席者

(動画出席)

教育委員	青木 義男
------	-------

出席した事務局職員

政策経営部長	有馬 潤
政策企画課長	吉田 有
総務部長	尾科 善彦
総務課長	荒井 和子
教育委員会事務局次長	水野 博史
地域教育力担当部長	湯本 隆
教育総務課長	諸橋 達昭
学務課長	大橋 薫
指導室長	氣田 眞由美
新しい学校づくり課長	渡辺 五樹
学校配置調整担当課長	早川 和宏
副参事(施設整備担当)	伊東 龍一郎
生涯学習課長	太田 弘晃
地域教育力推進課長	河野 雅彦
教育支援センター所長	阿部 祐司
中央図書館長	松崎 英司

議題等

- 1 開 会
- 2 坂本区長挨拶
- 3 議 題

誰一人取り残さないための居場所づくりについて

ー青少年の社会的自立に向けた力をはぐくむために

(1) プレゼンテーション

「板橋区における不登校児童生徒の現状」

指導室長

「ごっちゃんルームの取組」

板橋第五中学校長

「ファーストレゴリーグ ブラジル大会」

成増ヶ丘小学校長

(2) 協議

- 4 閉 会

傍聴者

2名

## ○坂本区長

皆様おはようございます。

本日はお忙しいところご出席をいただきまして誠にありがとうございます。

ただいまから令和4年度、板橋区総合教育会議を開会いたします。

はじめに、中川教育長、また、教育委員の皆さんにおかれましては、日頃から板橋区の教育の伸張発展にご尽力をいただき、誠にありがとうございます。

この総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律によりまして、地方公共団体の長と、教育委員会が教育行政について、協議、調整を行い、両者が教育施策の方向性を共有するなど、連携体制の強化をするために設けられたものであります。

教育を行うための諸条件の整備その他地域の必要に応じた教育・学術・文化の振興であるため、重点的に講ずべき施策について協議する場でもございます。

本日の議題は、「誰一人取り残さないための居場所づくりについて」であります。

教育委員の皆さんからは、それぞれの立場から、様々な観点でのご意見を頂戴したいと考えております。

よろしくお願いいたします。

まず協議に入る前に、「板橋区における不登校児童生徒の現状」についてを、指導室長の方から、教室以外の校内での居場所である「ごっちゃんルームの取組」について、板橋第五中学校、太田校長先生から、「ファーストレゴリーグ ブラジル大会」について成増ヶ丘小学校西谷校長先生からそれぞれ説明をお願いします。

よろしくお願いいたします。

## ○指導室長

よろしくお願いいたします。指導室長の氣田でございます。

まず、板橋区立学校の不登校の状況についてのお話をさせていただきます。

全国の小中学校で約2%、約20万人、中学校に限定しては、7,8人に1人が不登校の傾向というところでは言われているところで、増加の一途をたどっているところです。

これにつきましては本区も同様な傾向でございまして、令和3年度のものは、まだ公表されておきませんので、令和2年度までのデータをお示しさせていただきます。

小学校においては、275名、中学校においては、424名、計699名が不登校児童生徒となっております。

この5年間で1.3倍の増加となっております。

続きまして、不登校の出現率ですが、こちらも小・中学校ともに増加をしております。

中学校は、多少増減を繰り返してはいるのですが、やはりこちらについても、都よりは低いのですが、全国よりは多くなっています。

続きまして、学校復帰についてでございますが、こちらは、小学校は、ずっと復帰率が高い傾向にあったのですが、令和2年度に若干減少したという状況です。

中学校におきましては、都の平均より復帰率が高くなっております。

小学校中学校ともに、区のほうで示しております不登校ガイドラインに沿いまして、早期の対応ということに力を入れております。

例えば、欠席が6日以内、1週間以内の場合は、アセスメントシートを使いまして実態把握に努め、欠席が7回以上を超えた児童生徒については、校内で不登校の校内委員会を開きまして、登校支援シート等を使いながら、その子その子に応じた支援対策支援方法の検討を図っているところでございます。

不登校の要因についてでございます。

こちらが小学校の表でございますが、ご覧の通り、ご本人に関わる状況というところがやはり大変多くございまして、その中でやはり、無気力不安、生活リズムの乱れといったところが本人に関わる場所、それから家庭に関わる状況で、親子の関わり方とかといったところが多くなってございます。

この傾向は中学校のほうの要因も共通しているところでございます。

ただ中学校でやはり特徴的なのが、学業の不振、それから進路に関わる悩み等々が要因として現れてきております。

それから、区独自の不登校児童生徒へのアンケートをとっているのですが、そちらの中で出てきているものの多くとしては、何となく、特に何かこれという理由はないけれども、何となくということをお返している児童生徒が多くございます。

本区ですが、SDGsの原則である誰一人残さないというところを掲げまして、多様な居場所というところを今進めているところでございます。

もちろん第一は、学校が居心地のよい場所、安心安全な場所になることが大事だとは思いますが、昨今、必ずしも学校やその社会、学校の集団が子どもたちにとって、居心地のよさを全員が感じる場所であるとは限らなかつたり、その集団に馴染めないお子さんもいるというのが現状でございます。

こういった多様性を認め、一人一人にあった、環境調整をして、そしてインクルーシブな環境整備をしていくということをおこ、今、教育委員会全体を挙げて目指しているところでございます。

そのために、やはり大事なことでございまして、安心できる場所、そして信頼できる人、これが大事だと考えております。

場所としましては、教育委員会事務局全体で、センターであったり、図書館であったりま

なぼ一とであったり、あいキッズ、教育科学館、それから今、検討を進めております部活動の地域移行、そういったことも含めまして、様々なところを、今、整理をしているところでございます。

それから学校におきましては、学校内の教室の確保ということで、学校には来られるけれども、教室には行けないとか、学校にずっといるのがつらくなったお子さんが少し息を抜くような場所ということで、校内別室のフリースクールの的なところの確保のため、昨年度、小中全校に整備をしたところでございます。

そして人でございますが、これは担任・教員はもちろんですが、それだけではなく、養護教諭であったり、それから、特に中学校はスクールカウンセラーの存在が非常に大きくなっております。

また、ICS、それから地域の方々、大学生のボランティア、こういった斜めの関係の大人の存在、信頼できる人の存在、これが大変重要だと考えます。

教育委員会としまして、これまでは、先ほど申し上げましたように、不登校が増加傾向であるとか、全体的に出現率がこうだというようなことで、どうしても全体像でこれまで見てきたところがあるのですが、これからは一人一人教育委員会としても、区内の子どもたちを追っていきたいと考えております。

その一つの方法として、区全体で、今回、夏季休業中に向けた不安に関するアンケート調査を実施いたしました。

8月22日から26日の間に、全員に配られております端末を使って、そこに簡単な質問紙をつけました。

そこで不安がある、心配と回答したお子さんに対しては、翌週の31日までの間に、各学校が家庭訪問したり個人面談をしたり、端末でのオンライン相談をしたりするなどしまして、一人ひとりへの対応を図ってきていただいたところでございます。

また、不登校児童生徒への端末を活用したアンケートの実施ということで、これは教育委員会として不登校児童生徒のお子さんに直接投げかけて、それに回答いただいているので、回答は多くはないですが、面ではなく、一人ひとり、点で追っていきたいと考えているところでございます。

引きこもりを作らない、これが最大の目標、目的でございます。

次の不登校対策委員会というのがございますが、そちらの方で、東京家政大学の本間先生という方からいろいろとご助言いただいておりますところですが、先生の方から、小・中学校なら、今ならまだ間に合う。高校生になって、なかなか社会とのつながりが持てなくなったら、それは厳しいのだというお話を再三いただいております。

そういった意味でも、安心安全な場所、信頼できる人、そして子どもたちの自己肯定感、一人ひとりの自己実現が図れること、それが子どもたちの自立につながり、生き抜いていく力、それをつけていけるようにしていきたいと考えております。

こういった教育委員会事務局全体で取り組んでいることについて、先日、NHKの取材が入りまして、私の方でそういった取組をお話しさせていただいたところでございます。

各学校が実施するのはよくあることだが、オール教育委員会、オール板橋での取組という、そういった全体を受けての取組というのは、なかなか他の自治体ではないことなので、これからも注視して、いろいろな取組を聞かせてほしいというお話を頂戴したところでございます。

これからの板橋区、社会を担っていく創造していく子どもたち、この人材を、ぜひ自立に向けて子どもたちの支援をさらに図っていききたいと考えております。

簡単ではございますが、以上でございます。

#### ○坂本区長

ありがとうございました。

#### ○太田校長

こんにちは、板橋第五中学校校長の太田です。

本校では、不登校対応で別室指導を行っていますが、その教室の名前が「ごっちゃんルーム」といいます。

この「ごっちゃん」は、板橋第四小と行っている小中一貫教育の一貫キャラクターです。

一貫キャラクターの名前がきゅうちゃん姉妹というのですが、その中学生キャラが「ごっちゃん」といまして、この教室を開設するにあたって、名前を考えてほしいと生徒に頼んだら、ごっちゃんルームがいいという声があったので、こちらとしました。

動画がありますので、まずはその動画をぜひご覧ください。

(動画視聴)

このような形で、本校では、「ごっちゃんルーム」を子どもたちに周知して、活用しています。

「ごっちゃんルーム」の開設の経緯なのですが、本校は、以前から不登校生徒が非常に多い学校です。

実は昨年度は、9年生40人しかいないところで10人不登校で、25%というとんでもない数字だったのですが、これはうちでも特殊な例なのですが、今までも別室で、週2回ぐらいは、こういった指導をしていたのですが、もっと充実させていきたいと考えていました。

今年度は、不登校加配の教員が配置されたこと、本校の坂の上の東京家政大の学生さんのボランティアが結構たくさん来てくれるようになったとか、あとはNPOの方からもボラン

ティアで来ていただけるということがあったので、これだったら毎日開設しても人手が足りるのではないかとということで、今年度から毎日の開室を始めました。

運営については、毎日2時間目から5時間目までやっています。

2時間目から5時間目というのは、他の生徒の目に触れたくないという子もいるので、それなら少し時間をずらそうかということと、朝の1時間は結構教員が忙しいので、そこに人を割くのは少し難しいので、少し余裕を持って、無理のない範囲でできるように2時間目から5時間目までとしてあります。

それから、教員は必ず1人は教室につけるように時間割上で配置してあります。

NPO法人のLFA (Learning for All) の方から週に1回来ていただいたり、学生ボランティアは主に家政大の学生さんが来てくれていて、1人だけ淑徳大の男の子も来てくれています。

不登校生徒以外も利用していいですよということでやっています。

不登校になりそうな、ちょっとその気のある生徒に、教室にいると息が詰まっちゃうっていうときには、使わせるということもしています。

中身は先ほどありましたけども、お勉強したり、おしゃべりしたり、YouTubeを見たりと自由度を高めています。

そうすることで、利用頻度を上げているというところもあります。

あとは他の子の目を気にする子もいますので、布のパーテーションではありますが、そういったもので、パーソナルスペースも確保しています。

それから、「ごっちゃんルーム」の1学期の成果と課題といったところなのですが、これはまず、不登校生徒が学校に登校できる日数が確実に増えました。

7年生の中に、入学する前の小学校2年生ぐらいからずっと不登校という子が2人いるのですが、それ以外で不登校になった子は今のところいません。

生徒たちの不登校の生徒への理解は、非常に高まってきているかなと思います。優しく接して、もともとそんなにひどい辛辣なことを言ったりということはないのですが、今まで以上に理解は高まったかなと感じます。

課題は、こちらを利用させたくないという、そこは駄目なんだというような、保護者の中に何かそういった意識がある方がいらして、子どもが「ごっちゃんルーム」を使っていると、なるべく使わないようにみたいな感じで、子どもに言っていたりということがあります。

それから、ボランティアですね。

NPOと今、大学生だけで、お願いしているのですが、たまたま私が家政大の英語コミュニケーション学科の教授と知り合いだったので、その関係で、ボランティアの学生さんを出

してもらえているということがあるので、それもいずれはなくなってしまう関係なので、続けていくために、地域の i C S とかに力を借りて、もっと地域の方に入っていただく必要があると思っています。

また、ここには載せなかったのですが、1 回もクラスに入ったことがないと子をごっちゃんルームに登校させるのは、今のところできてませんし、すごくこれはハードルが高いです。

ですから予備軍の、不登校になりそうな子を、不登校にしないというところでは、かなり成果を上げられるのではないかなと思うのですが、本当にもうずっと不登校な子を学校に復帰させるために、いきなりごっちゃんルームに登校させるというのは少しハードルが高いような気がしますので、またそこは、これから工夫して改善していかなくてはいけないと思っています。

あと、一つだけすごく失敗、私は大失敗だと思ってるのですが、担任の理解が少なく、生徒指導がうまくいってない若い先生がいます。9 年生の担任なのですが、女の子でどうしても勉強に気持ちが向かない子がいるのですが、その子に対して「そんなに嫌だったら「ごっちゃんルーム」でも行けば」みたいな感じで、悪い言い方すると追い出してしまうということがありました。ちょっと今はその子の対応に苦慮してるのですが、何とかその子にも、やりたいことを見つけさせて、目標を持てるように指導することを、今頑張っているところなのですが、そういった大変なところがあります。

非常に簡単ですが、私の方からは、以上です。

#### ○坂本区長

ありがとうございました。

#### ○西谷校長

おはようございます。成増ヶ丘小学校の校長西谷と申します。よろしくお願いします。

まずはこちらの動画をご覧ください。（動画視聴）

これは先月、8月に行われた、ファーストレゴリーグブラジル大会の表彰式の様子です。

本校の卒業生のチームが壇上に上がってきました。

部門賞ではあるのですが、イノベーションプロジェクトアワード、セカンドファイナリストとして、世界第二位の賞をいただけてきました。

このイノベーションプロジェクトというのは、毎年テーマがありまして、今回のテーマは、「物流」なのですが、それについて問題点を挙げ、革新的な解決策を考え、試作品とかを作ってプレゼンテーションするという、そのプレゼンテーション部門の方で今回の第二位の賞をいただいたということです。

90 チームぐらい参加しまして、参加費も 15 万ぐらいかかりまして、この規模を見ていただ



くと分かるように、非常に大きな大会で自信をつけてきたというところです。

ちなみに、司会者も含めてほとんど誰もマスクしてない、日本人だけがマスクしているという状況でした。

このファーストレゴリーグは通常FLLと呼ばれていまして、小学校4年生から高校1年生が対象の世界最大規模のロボットの競技会です。ロボットの競技会ではあるのですが、ロボットゲームのほかに、二つのプレゼンテーションがありまして、その一つが、今回賞をいただいたイノベーションプロジェクト、もう一つがロボットデザインといひまして、どんなロボットを作ってどんな戦略でどうやって得点を上げるのか、そういうプレゼンテーションで、それらを含めた、すべての活動であるコアバリューも含めた総合順位で争っています。

今回、うちのチームの卒業生のチームが提案したのが、人為ミスでの荷物の破損を防ぐというマークつき段ボール「はこしるべ」というもので、段ボールの端に、扇形のマークをつけることによって、荷物を正しく積み上げようをという意識を持たせて、荷物の破損を防ぐというものです。

日本では段ボールが崩れて破損しただけで、中の商品が無事でも、それが返品されて売れない商品になってしまうってことがあって、その辺を防ぐという考えです。

では、ブラジル大会の様子、プレゼンの様子を、短い時間ですが、簡単に紹介させていただきたいと思います。（動画視聴）

こちらは賞をいただいたプロジェクトのプレゼンの様子です。

全部英語でプレゼンをします。英訳は直していただいたのですが、一応、原稿もプレゼンも全部子どもたちが作っています。

続いてロボットゲームの様子ですね。（動画視聴）

2分30秒でどれだけのミッションをクリアできるかっていうことで、得点を狙うのですが、白い羽を落としたり、途中で橋を倒していったりします。今、橋を倒したのですが、このあとコンテナを掴み、列車を押しします。

これはラインに沿って動くプログラムです。ここで、青いコンテナを回収し、戻ってきて、次のアタッチメントにつけかえて、次のミッションをするためのプログラムをスタートさせ、全部で3走まで走るようになっています。

他にもいろいろあるのですが、今回、このチーム最高得点の565点を取ることができまして、彼らにとっては、自分たちの実力を発揮することができたのですが、世界的には90チーム中、ロボットだけでは26位なので、プログラミングの実力はまだまだというところです。

そのほかに、ピットというところがあって、英語で積極的にコミュニケーションを図るのですが、やはり海外の人には日本の文化が大人気で、特にブラジル人たちには、漢字が人気

で、名前をお聞きして、それを漢字の当て字で書いてあげるとすごく喜ぶのですね。あとは折り紙で鶴を作ってあげたり、それから七夕に自分たちの願い事を書いたりしました。

海外の他のチームのピットに交流しに行きたいのですが、余りにも人が来て、絶えないので行けず…みたいなの。もう常に行列状態で、缶バッジが欲しいっていうのでジャンケンで勝ったらあげるっていったら、ブラジルの人たちもジャンケンポンと言ってました。ブラジルでもジャンケンは、ジャンケンポンって言うのだそうです。

さて、今回、参加したのは、小学生のチームではなくて卒業生のチームです。

では、何で、小学校に卒業生のチームをつくったかといいます…と。

これがネクサスのメンバーなのですが、現在の中学3年生、9年生が中心になります。赤塚第二中の子たちが中心なのですが、一番左に赤二中を卒業した高校一年生がいます。保護者同行ができないということで、高校一年生の子はブラジル大会には参加できず、右の5人の子たちで、参加してきました。

そのネクサスメンバー6人のうち5人は、実は3年前に特別賞いただいてトルコに行ったときのメンバーなのです。黄色で囲んでいる子たちが、今回の中心メンバーですが、当時彼らは5年生チームで、12月の予選で負けているのですね。

しかし、1歳上の先輩たちの追加メンバーという形で連れてってもらったっていうことで、その時が本当に楽しかったと、またやっぱり世界大会行きたいと…。そして、今度は先輩たちを追加メンバーとして世界大会に連れて行きたいんだと、こういう強い目的意識がありました。

その後、6年生になって大会に出たのですが、コアバリュー賞を取ったものの総合12位で、残念ながら世界大会に行けず、実はこの年からコロナが始まって、そもそも世界大会がコロナで全部中止になってしまいました。

それで、彼らとしては、やっぱりもう1回世界大会に行きたいということで、小学校を卒業しても、中学生としてFLLをやりたいという気持ちがあったので卒業生の中学生チームを作りました。

実はもう一つ理由がありまして、この白で囲んだ生徒、今は高校1年生なのですが、卒業したときは、小学生チームしかなかったもので、活動には参加できませんでした。でも、毎回活動日に来て、何するわけでもなく、おしゃべりして帰っていくのです。

あとで本人とお母さんに聞いたのですが、中学校でちょっとうまくいなくて、不登校になってしまって、学校に通えなかった時期があったのです。でも、このFLLの場所は、自分にとってすごく居心地のいい場所で、毎週来ていたと…。本人に聞いたら、FLLをまたやりたいっていう意思があったので、復活できるといいますか、そういうきっかけになるか

などと思って、中学生チームを作ったというところです。

その中学生チームネクサスの1年目は、プロジェクト賞というのをとりまして、総合8位だったのですが、やはりこのコロナの関係で世界大会がほぼ行われず、残念ながら出られませんでした。そのときに、先ほどの不登校傾向の生徒が中心になってつくったのがこのネクササイズカレンダーです。

この絵も全部描いたのですが、もちろん赤二中さんの努力もあって、不登校から復活して、今は、非常に元気に学校に通っています。

そして、今回のシーズンですが、予選の2日目に総合優勝し、日本大会も総合7位でプロジェクト賞も2年連続とって、ブラジル大会に行くことができました。

それで、念願の世界大会、しかもオンラインではなくて、現地での大会っていうことで、今回、部門賞ではありますが、賞を取ることができ、またロボットでも、交流でも、自分たちの目的をすべて達成することができたかなと思っています。

私はこのFLLの活動で、子どもたちは本当に劇的に変わるとしています。

それから、これからの時代の必要な力をすべて育ててくれるものだと思います。

そしてもう1つ思ったのが、共に楽しみ、苦楽を共にした仲間がいる大事な居場所になっているというのをすごく感じています。

世界大会に連続で出られるほど甘くないのですが、今シーズンの活動も始まり、子どもたちが楽しく、そして成長して、居場所をつくることができるように、これからも頑張っていきたいと思います。以上で終わります。ありがとうございました。

## ○坂本区長

3人の先生方から説明をしていただきまして、ありがとうございました。

ただいまの説明につきまして、委員の皆さんから、ご質問等ございましたらご発言願いたいと思いますが、いかがでしょうか。

(意見なし)

ではご質問がないようでございますので、先に進めたいと思っております。

それでは本日のテーマでございます。

「誰一人取り残さないための居場所づくりについて」をテーマにして、協議に入りたいと思います。

最初にこのテーマについて、まず私の方から、考え方と申しましょうか、最近気づいたことを含めて、お話を述べたいと思っております。

まず、子どもたちは、年齢に応じた経験を重ねるなかにおいて、健やかに育ち、多様な人との関わり合いを通して成長いたします。

特に学業以外の学びにおいて、社会的自立を果たすために、重要なことはいくつもあるか

と思っています。

しかし、家庭や教育といった、限られた人間関係の中だけでは、そのような機会を得ることはできないと考えておりますが、いかがでしょうか。

また、コロナ禍のこの数年間、体の面や、あるいは心の面においても、思うような活動の場を得られずに、特に地域の方など、親や先生以外の様々な大人の方と関わり合いをもって、活動する機会が少なかったことは、子どもたちにとっても大変残念なことと考えております。

さらに、子ども同士の関わりにおいては、教え教わるといったような、同級生以外の異年齢の集団活動を経験する機会が減ってきていることも、気がかりでありました。

もちろん、現在、学校においては、多様な他者との協働を重視した「協働的な学び」の充実が図られているところではありますけれども、学校の外においては、今、一足先に新しい変化の兆しが芽吹いているというふうに感じております。

季節柄、プールのお話をいたしますけど、学校で実施をしております水泳の授業が、屋外プールを使用するために、夏を中心に行われております。

学校にある屋外プールは、季節を感じる点においては、適した施設でありますけれども、近年の異常気象が常態化している環境においては、夏場は熱中症のリスクが飛躍的に高まりに、思うようにこういうことができない時もございます。

また、秋から春にかけても、使用することができません。

さらに、先生による児童生徒への一律の水泳指導や水泳教室は、誰にも平等に水泳を始めきっかけを提供するには適していると考えますけれども、泳力の向上とか、或いはもっともっとレベルの高い、オリンピックとか各種コンペ、競技会など、こういった出場の機会など、指導の限界にも達してしまうのでもあるかと思っております。

そうした中、平成 31 年 2 月には、区立小豆沢体育館のプール棟を増築をして、短水路公認プールがございます、温水プールが設置建設をされました。

そこで、小豆沢体育館室内プールにおいては、板橋区体育協会が板橋区水泳連盟と東京ドームスポーツの協力を得ながら、「板橋区から世界へ」「トップスイマーを育てる」これを合言葉にして、幼児から小学生を中心にスイミングクラブを運営し、スイマーの育成を今、努力をしていただいております。

子どもたちにとっては、水泳を通じて、新しい人との出会いや自分の成長スピードに応じた指導を受けることができる機会が増えることとなっているかと思えます。

ここでは、学校のプールの抱える指導、或いは、実施期間の限界を超えて、水泳が大好きな子どもたちの新たな居場所、活動の場として機能し始めていると考えます。

もう一つは違った視点でとらえた居場所となりえるものとしまして、板橋こども動物園や

高島平分園で取り組まれております、子ども動物クラブというものがございます。

このクラブにおいては、小学3年生から中学生までを対象にして、放課後や学校休業日に1年を通じて、動物のお世話や、接客体験を行っているのです。

体験活動といいましても、その活動の中身については、大人の飼育員とほぼ変わらずに、えさづくりに始まり、えさやり、ボディケアや糞尿の後始末まで多岐にわたっております。

また、入会の時期や参加年数が子どもにより異なりますので、入会したての子どもが動物に恐怖感を持っていたり、世話をする手つきがおぼつかないものになることがございます。

こうした中、そのようなときには、上級生がアドバイスをしたり、やって見せることによりまして、始めはこわごわ参加していた子どもたちが、小動物からだんだんと大きな動物を世話する経験を重ね、最後には大きな馬の世話を難なくこなせるまでに成長してまいります。

このように、大好きな動物の世話をする機会を得て、成功体験を重ねていく中において、大抵のお子さんは、獣医や、あるいは牧場、動物園といった場所で仕事をする夢を持つようになるそうでもあります。

現在そういった夢を持つ子どもたちが、何人も高校生になった後に、アルバイトに来てくれるとのことでした。

また、クラブを支える場である指定管理者と、公益財団法人ハーモニセンターにおいては、「たくましく育てる」をモットーに、失敗を恐れず、うまくいかなくても、それを乗り越える経験を積んでもらえるように、子どもたちに、まず自分で考えることを促しているそうでもあります。

子ども動物クラブは、このようなアントレプレナー教育と申しましうか、キャリア学習の場を提供しているものであります。

クラブを通じた学校外の仲間づくりといったコンセプトも相まって、多様な居場所の一つとして機能していると考えます。

なお、余談ではありますが、クラブを卒業した後に、高校でひきこもりがちになった子どもたちが、今まで一番楽しかった記憶を辿ると、子ども動物クラブのことを思い出し、動物関係の専門学校へ入学する夢を持つに至り、現在ここで、アルバイトをしているところであります。今ご紹介いたしました小豆沢体育館温水プールと子ども動物園の事例については、居場所づくりの新たな広がりの可能性、方向性を示唆するものの一例としてお話をいたしました。

事例を通じて、お伝えしたかったことは、誰一人取り残さないための居場所として、重要なことは、ただの「場所・スペース」を用意するのではなく、多くの仲間や支えてくれる人との出会い、また、成功や失敗をたくさん経験して成長していく、そのような社会で生き抜

くための必要な力を蓄えることができる空間と時間を、人生経験として得る四次元的なプロセスであることではないかと感じております。

そんな点が重要ではないかと感じております。

以上、私の方から、冒頭に意見を述べさせていただきました。

教育委員の皆様からも、順にご意見を賜りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いしたいと思っております。

それでは、初めに、本日ご欠席の青木委員から事前に映像によるご意見を頂戴しておりますので、こちらをご覧いただきたいと思っております。

よろしく願いいたします。

### ○青木委員（動画）

皆さんこんにちは。教育委員の青木です。

今日は学内会議の都合で参加できずに申しわけありません。

私から一言だけテーマに沿って意見を述べさせていただきたいと思っております。

板橋区は、様々な形で誰一人取り残さない居場所づくりの取組が行われております。

あいキッズや i - y o u t h を含めて、様々なところで、子ども、若者たちが集って、様々な体験を積みながら社会性を養うといったところでは効果が出てきているところかと思っております。

学校の違いというところで考えると、様々なものを取り組んでいく中では、やはり教師がいて教室があってというところに対して、若干であります、人との関係性を、育むですとか、人が多様な存在であるというようなどころ、この辺を生み出していくというようなどころ、この辺はまたちょっと難しい点があるのかなと思っております。

今、板橋の中に存在している居場所の中には、基本的にはボランティア同士であるとか、同じ趣味嗜好というような若者たちの集まり或いは地域の人たち、一緒に新たな活動を起こすというようなことが、進められているかと思っております。

この辺をもっともっと中身を濃くしていくことが大事というところと、さらに居場所を広げるといったような可能性の中では、板橋区の中には、例えば中央図書館、エコポリスセンター、それから、旧粕谷家等の文化財がございます。

こういったところでも、当然、様々な方が活動して、それぞれに対して興味を持つといったような子どもが少なからずいるかと思っております。

例えば、読書活動を通じて、ライブラリーアソシエイトという大学生なんかでも図書館の司書さんお手伝いするような立場、こういったような人材がおります。

中学生あるいは高校生になると、そういったような活動も十分できるのではないかと思いますし、エコポリスセンターでは、いわゆる学芸員の支援という形で、説明の手伝い、実験

の手伝いみたいなどころからこういったものに興味を持つ。環境教育に興味を持つといったような人材の育成。

さらには、旧粕谷家では、歴史教育か何かに興味関心を持つ子どもたちというのを、この活動の中にうまく巻き込んでいくというようなことができるのではないかと考えています。

こういったところで、少しでも、居場所というのを、多様な形で広げていくことが重要ではないかと考えています。

児童生徒、これは成長過程という形で、従前、身近な教育委員会するときにも、ご提示させていただきましたが、非常に大事なものは、子どもたちというのは社会に出るにあたって、まずは保育園小学校等々のコミュニティの所属から始まって、どんどん向上していく中では、最終的に自己肯定感というのを持って、そして自己の確立、挑戦意欲につなげるということが重要になってくるかと思っています。

当然、居場所の中でも、この肯定感を高め、そして挑戦意欲につなげていく取組が重要になっております。

そういった意味では、まずはコミュニティに所属して、多くの人たちとコミュニケーションを交わすというところから始めるわけですが、最終目標に向かって、何かシナリオというか、ストーリーがあったほうがよいのではないかと考えております。

そういった意味では、必要なのは良質のコンテンツという言い方になります。

板橋区の中でも、夏休み子ども起業塾というアントレプレナーシップ教育もすでに開催されていて、こういった取組は非常に有効なのではないかと考えていますが、私が関わっている中では、今日発表のあった西谷校長先生の FFL ブラジル大会といったような、いわゆるプロジェクトベースドラニングやあるいはプログラミング教育といったようなものに関連して、子どもたちがどんどん世界に出て行って、そして自己肯定感、それから挑戦意欲を高めるといったような取組、こういうシナリオも重要だと思っています。

区内の日大豊山女子高校の子たちも数年前に、F l i n s c h o o l s という世界大会でシンガポール出て行って、彼女たちが非常に自己肯定感が高い或いは達成感を、といったような意見が聞かれています。

このほか、私が取り組んでいる宇宙エレベーターロボット協議会や大学の中でも、高校生なんかを巻き込んだ新たな宇宙プロジェクト、こういったようなものの中で中学生高校生の自己肯定感と挑戦意欲の向上を図っているというところがあります。

そういった中で、今、大事なものは、例えば i - y o u t h 等でも行われているかと思うのですが、先輩たちの苦労話を聞くというところ、これが大事かと思っています。

ファーストレゴリーグで何かしらのメンターとなった大学生も、実は高校の時に居場所探

しの時期がございました。

学校に行けなくなったという時期があったというところを含めて、そういった子たちの生の声が子どもたちに先輩から伝わるということは非常に重要です。

そういった中では、同じように苦勞して、病院に長く居て学校に行けなかったが、今大学生の中で、様々な活動を繰り広げられている人間六度さんですとか、仕組み体験からメタバース企業を立ち上げたような加藤さんですとかこういった取組、これは自分たちの経験の中から、パラレルワールドに活かすとか、さらには、派生してメタバースゲームを作ったような、メタバ塾といったようなものも今立ち上がっていて、こういったようなものと、地方自治体との協働した活動というのも一つ、この先では検討の余地があるのかなと思っています。

以上簡単ですが私からの意見とさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

#### ○坂本区長

はい、ありがとうございます。

ただいま青木委員のご意見の発表がありましたけれども、皆さんから、今のご発表の映像を見てご意見ございましたら、お願いしておりますがいかがでしょうか。

よろしいですか。

はい、じゃ、中川教育長どうぞ。

#### ○中川教育長

今、良質なコンテンツというお話がございました。

私どもは、どうしても問題点や課題点を何とかしていかなくちゃいけないという視点がついつい強くなるのですが、今日の西谷校長先生のF L Lのお話もあるように、夢や希望を持ってトライしていく、未来へ創造的なトライをしていることの重要性というもので現実的に今、区内でも教育委員会だけではなく区長部局でも先ほどの子ども起業塾等も含めてですね、区内の業界の方々と、コラボレーションした様々な活動が行われている。そういったことに、子どもたちがやっぱり積極的に参加できるような環境づくりというものが一つ必要と思っていました。もう一つ、ようこそ先輩なんていう番組もありましたけれども、先輩の話を聞くというのは、子どもたち、これとても楽しみなので、こういったこともぜひ今後、学校教育の中でも展開できたらということを非常に強く感じました。

以上です。

#### ○坂本区長

はい、ありがとうございました。他の方どうですか。

長沼委員さん、どうぞお願いいたします。

#### ○長沼委員

青木委員のお話の中で、いろいろ学ばせていただいたことがあります。中でも、5段階の中で積み上げていく中に、自己肯定感とか、挑戦意欲というものがあって、そういったもの



を子どもたちに実感をしてもらって成長していくっていうことの重要性を改めて感じました。

青木の話の伺っていて、やはり学校という居場所も、もちろんこれは大事です。先ほど氣田室長もおっしゃってました。

一方で、学校以外の場所というのも、様々な形で確保していくことの必要性というものも感じました。

私、よく子どもたちが成長するときに、いろんな大人と関わっていく必要があって、まずは保護者、そして先生、結構この二つが大きな存在なのですね。

でも忘れられがちなのは、私が第三の大人と呼ぶ、それ以外の様々な社会の生活をしている方々あるいは教育長がおっしゃった先輩、いろんな形で大人たちが関わることによって、一人ひとりの生徒・子どもたちを認めていくということ。これが自信につながって、自己肯定感の醸成に結びつく、それを板橋区全体で取り組んでいくということを今日お話しできればと思ってきました。

以上です。

#### ○坂本区長

他の委員さんはいかがですか。

ではどうもありがとうございました。

では青木委員の発表に続きまして、高野委員からお願いしたいと思いますが、よろしくお願ひいたします。

#### ○高野委員

私は1学期に小学校でボランティアとして、主に1年生の児童の見守り支援のお手伝いをしました。

その中で、登校時間から大分遅れて朝食をとらずに登校する子や、児童も保護者も日本語がよくわからないために学校の準備が十分にできない子、教室の中にずっといることができずに飛び出してしまう子や廊下に段ボールで部屋をつくってその中にいると安心する子、また大きな音が苦手な子や、病気ではないけれど毎日のようにお腹が痛くなる子など、わずか2ヶ月間だけでしたが、学校生活で困難を抱えている子どもがたくさんいるということを実感いたしました。

先ほど指導室長から板橋区の不登校児童生徒の現状について説明がありましたが、子どもたちが抱える困難は実に様々で、一人ひとりの子どもにとって、一歩踏み出すきっかけをつくるためにも、安心して過ごせる居場所の選択肢を増やしていくことが必要だと思います。

様々な理由で学校に行くことができない、また、教室の中にずっといることが難しい児童や生徒のための居場所として、フレンドセンターや大原成増の i - y o u t h、中央図書館などを使った中高生勉強会などの学校外の施設があります。

また、それに加えて先ほど紹介のあった板橋第五中のごっちゃんルームのような、学校内での教室とは異なる居場所・別室づくりが進められています。

また、小学生の放課後の居場所としてあいキッズは非常に重要な役割を果たしていますが、学校と同じ人間関係であることや、時間管理や細かい決まりが合わないと感じ、利用をためらう子どももいると聞きました。

そのような場合には、CAP'Sも登録をすれば、小学生も利用できるのでは、選択肢の一つに加えることができるのではないかと思います。

中高生若者の安心安全な居場所の一つとして、まなぼーと大原 i - y o u t h に L e a r n i n g f o r A l l があります。先ほど、太田校長先生のお話の中にも少し出てきて、ごっちゃんルームでもお手伝いをされているそうなのですが、令和3年10月から配慮が必要な利用者への支援や i - y o u t h 機能の拡充を目的に活動が始まりました。

おしゃべりをしたり、自習したり、自由に過ごす居場所としてのリビング、やってみたい学んでみたいことをスタッフと一緒に実現するラボがあり、子どもたちからアイデアが出て企画として、i - y o u t h の紹介動画作成や、みんなでアート作品を作るイベント等が実施されました。

また従来のまなぼーと大原の、利用者の染物同好会の方々に教えていただきながら、一緒に藍染めを体験したりもしています。

このようなことを通して、自分がやりたいと思ったことを実現できるという経験や、今まで話したことがなかった人たちと新しい人間関係を築くことができました。

わずか2年足らずで、利用者と年齢が近いスタッフや、大学生ボランティアが子どもたちと心理的な距離を縮めることで、利用者がふえ、また子どもたちが抱える課題について相談を受けることが多くなっています。

これまでも、近隣学校や子ども家庭総合支援センターなどの外部機関と連携をとってきましたが、これからは、まなぼーとに来る子どもたちを待っているだけでなく、本当に支援を必要としている子どもたちに出会えるように、近隣小中学校のコミュニティスクール委員会に出席したり、主任児童委員の方々と情報共有をして、活動を広め、深めていきたいと話していました。

誰一人取り残さない居場所づくりとして、多様な子どもたちのために、選択肢をふやすこと、従来の居場所に加え、学校内の教室と異なる居場所・別室づくりをさらに進めること、この二つに加え、保育園、幼稚園から小学校へ、小学校から中学校への接続を円滑にしているためにも、小学生が長期休業中等にCAP'Sを利用することで滑らかな接続や幼児と小学生の交流が期待できます。

また、小学校高学年が、i-y-o-u-t-hをプレ利用することで、先輩である中学生、高校生の交流から学ぶこともたくさんあると思います。

CAP 'Sやi-y-o-u-t-hの利用制限を見直して、利用しやすくすることで、小学生の居場所の確保だけでなく、子どもたちの成長につなげていくことができるのではないかと考えます。

**○坂本区長**

はい、どうもありがとうございます。

ただいまの高野委員のご発表について、皆さんからご意見いただいたと思いますがいかがでしょうか。

**○野田委員**

高野委員からいろいろなお話いただきまして、各所に開かれた居場所があるということが、改めて実感できました。

やはり実際にその不登校で、いろいろな悩みを持った子どもたちにこういったたくさんの選択肢、開かれた居場所、そこに待っている方たちがいるということを、知らせてあげたい、知ってほしいという気持ちになりました。

これに伴って、私たちがどういった行動ができるか、それを皆さんと一緒に考えていきながら、その子どもの心に寄り添って、同じ気持ちで考えていきたいという思いになりました。ありがとうございます。

**○坂本区長**

はい、どうもありがとうございました。

他に委員さんいかがでしょうか。

中川教育長よろしく申し上げます。

**○中川教育長**

高野委員の一番最後に、CAP 'Sやi-y-o-u-t-hの利用制限を緩めるということ、やはりこれは、どうしても大人サイドや行政サイドが良かれと思って決めたことを実際に進めていく中で、そこにも課題があったときにいい方向に展開していくという考え方はとても大事なことだとに思います。ぜひこのCAP 'Sについては子ども家庭部が担当になると思いますが、i-y-o-u-t-hは教育委員会が担当ということで、そのあたりについては早速検討に入って、その他の部分についてもその年齢制限とか使用制限って本当にいいものかどうかというところを改めて見直してというのはとても大事なことだと学ばせていただきました。ありがとうございます。

**○坂本区長**

はい、ありがとうございます。

高野委員どうぞ。

## ○高野委員

ありがとうございます。

以前からボランティアでCAP 'Sを訪問していたのですが、夏休みに小学生の利用はどのような状態になっているかお話を聞きに行きました。

保護者の方と一緒にすれば、すぐ利用できるけど子ども 1 人、子どもだけでの利用というのは、やはり登録の手続きが難しいということ、それと、まずは子どもたちが利用できるということをあまり知られていないということもおっしゃっていました。

暑い時などに、子どもたちが、CAP 'Sに来て涼むとか、大人と話すとかそういうことが気軽に利用できるといいなと思いました。

以前のような児童館のイメージで、体を動かす遊びとかそういうことは、今はできませんが、でも、本を読んだり、ゲームをしたり静かに過ごすことができるので、そういうところからまずは、利用したい子が利用できるということを伝えていくことが必要かなと思いました。

## ○坂本区長

ありがとうございました。大変貴重な意見をありがとうございます。感謝申し上げます。

他に委員さんよろしいでしょうか。

高野委員どうもありがとうございました。

それでは、続きましては、長沼委員からお願いいたします。

## ○長沼委員

私は居場所としての地域部活動についてお話しします。

先日、NHKの視点論点という解説番組でも、お話をした内容もありますが、本年 6 月にスポーツ庁から運動部活動の地域移行に関する提言が出されました。

同じように 8 月には、文化庁から文化部活動の地域移行の提言が出されました。

これによりますと来年度から 3 年間で期限として、休日の部活動を学校から地域に移そうということになります。

そして、やがては、平日の活動も移行するという提案になっています。

私は部活動改革を推進してきた立場から、この方針は、生徒の放課後の新たな居場所として機能させることができると考えています。

移行には幾つかの課題がありますが、これまで学校教育が担ってきた機能、とりわけ教職員の勤務時間からはみ出して行われることが常態化している部活動を学校から切り離すことは、肥大化、過熱化し過ぎた状況から考えて必要なことと考えています。

もちろんこれまで学校で部活動を支えてこられた先生方へのリスペクトは忘れないようにしたいです。

ただし、地域に丸投げするのではなく、社会教育として、教育委員会がリードしながら再編するわけです。

地域移行といいますと、今学校でやっている部活動をそのまま地域に移すというイメージが先行してしまいます。

それは無理なので、新たに地域でスポーツや文化活動、居場所を確保していくととらえて展開していくのです。

ですから、私は地域移行と呼ばず地域展開と読んでいます。

将来に向けて持続可能な形で、生徒が自分の好きなスポーツや文化活動をするためには、地域展開して進めたほうが有効です。

その理由は第一に、生徒は切れ目なく同じ指導者から指導を受けることができます。

中高生だけでなく、子どもから大人まで、さらには高齢者も一緒に活動できる地域クラブがあれば、異年齢異世代の人々が交流する居場所づくりにもなります。まさに社会教育、生涯学習です。

第二に、提言では、地域展開しても、指導を頑張りたいという先生方は、兼業兼職で地域クラブの指導者になることが推奨されていますが、そのような方々にとっては異動に左右されない仕組みになります。同じ地域クラブでずっと指導することができるからです。

生徒にとっても、顧問の先生がかわって困ったという声を聞きますが、地域クラブではそれがなくなります。

第三に、少子化の影響を受けて廃部になってしまう心配がなくなります。

私が委員長として関わった掛川市教育委員会の活動改革に関する委員会では、令和 9 年度には平日も含めて、全面的に地域展開していく案を策定しました。

少子化により今のままでは部そのものの存続が危うくなっているからです。小学校高学年にアンケートをとったところ、自分が進学する中学校にやりたいことがないと答えた児童が 26% いました。小規模校では 47% です。

このように長い目で見た場合に少子化の影響で廃部になることもなく、教員の異動に左右されない地域クラブの展開によって、生徒たちは自分の好きなスポーツや文化活動にずっと取り組むことができます。

地域全体でそのような仕組みをつくり上げることで、新たな居場所づくりにもなるのです。

先ほどの坂本区長のお話にあった、小豆沢の温水プールの事例や子ども動物クラブの事例は、まさにその先駆けとなる事例でとてもすばらしいと感じました。

最後にこのような仕組みづくりは教育委員会だけではなく、区役所の関連する部局とも連携しながら進める必要があります。

そこで坂本区長におかれましては、一層のご理解を賜りますようお願いいたします。

以上です。

#### ○坂本区長

はい。どうもありがとうございました。長沼委員どうもありがとうございました。

ただいまの意見の発表に対しまして、各委員さんからご意見ございましたらお願いいたします。いかがでしょうか。

高野委員どうぞ。お願いします。

#### ○高野委員

今、長沼委員の発言を聞いて、今ある部活動をそのまま地域移行という考え方だけではなく、最後の方にお話がありました子ども動物クラブですとか、小豆沢のプール等、学校外でやっていることが充実することで、また、地域への移行ということの理解も深まってくるのではないかと思います。

今の学校でやっている部活動という概念から、地域全体で子どもたちの放課後ですとか休日に多様な活動を支えるという視点を持って、これから私も眺めていきたいと思いました。

#### ○長沼委員

はい、ありがとうございます。

単純にすぐに地域に移るってことは現実的には無理なので、今やってらっしゃる小豆沢のプールや動物クラブというのがやっぱ充実をしてきてそこにいろんな形で関わっていくということが、段階的に地域展開していくというきっかけになるんじゃないかなと思います。

#### ○坂本区長

私からすみません。先ほど小豆沢のプールと加賀スポーツセンターもそうですが、温水プールは前からあったのですが、体育協会さんが小豆沢体育館の中に本部があるのですね。当時、小豆沢のプールができる前というのは、50メートルの屋外型プールがありました。

体育協会は50メートルは相当こだわってまして、やはり50メートルを残したい。

競技でいうと、メーター数が大事でして、それで、屋内プールで25mっていう話と、どっちがいいかって話があったのですけれども、私たちはもう25メートルにしたほうなのではないかということを思ってまして、それは、1年間通して使えるということなのですが、競技性が若干落ちるのですよ。

最後は、公認のプールとして作りまして、短水路の方では競技性を高めながらということになったのですが、本当にやはり、体育協会さんは、どちらかという自分たちがプレーヤー的な団体だったのですね。

それが今度教える立場があるじゃないかと。しかも、体育協会さんはいろんな競技があって、レベルといいますか年代の幅があったりしますので、いい選手がたくさんいることがわ

かりましてですね、であれば運営費を稼ぐということではないですが、そういうのを自分で出したい。

それが、地域に貢献できるという仕組みがあるのではないかとということで、体育協会さんの方でもやりながら、水泳連盟さんの方が二つぐらいのレーンを使いまして、水泳教室をやったところ、非常に人気が出ました。

やはり、いろんな方法があるのですが、人数が多くなってくると時間の波の中に吸収できるのはやはり地域の力でございまして、ボランティア精神がなければできない。あと、帰属意識とか愛着がなければ出来ないということで、非常にいい成果だと思っております、今後とも水泳だけではなくて、いろんな競技で、スポーツだけではなく、文化の方も含めて広げていけたらと思います。どうもありがとうございました。

他によろしいですか。

では、長沼委員さん、どうもありがとうございました。

続きまして野田委員さんからご意見を、ご発言を願いたいと思います。

よろしく申し上げます。

#### ○野田委員

よろしく申し上げます。教育委員の野田です。

本日私の方からは、保護者の立場から、また、日常子どもたちの見守る目線から不登校児童生徒への思いと、また、誰一人残さない居場所づくりについて、必要とされることについて、意見を述べさせていただきます。

私が実際にこのようなことを考える中で、冒頭に氣田室長からもお話しいただきましたが、子どもの心や思いに、寄り添う形で考えてみたいと思いました。

やはり子ども本人にかかる状況というのが非常に重いということで、まず、居場所というところもちろんございますけれども、子どもの置かれている環境ですね。

家庭をはじめ、学校、友達との関係、親との関係というところで、家庭での環境が深刻な状況である事例が散見されます。

そこに対して私たちに何ができるか、教育委員会事務局をはじめ、区の各所の方々のご尽力のおかげで、高野委員がお話しされましたようなたくさんの居場所を開設いただき、運営いただいているところであります。

その中で、私が必要じゃないかと思うことは、それぞれの居場所を活用できる人材ではないかということでありまして、今日はその話をさせていただければと思っています。

何よりも一番の居場所は家庭であり学校であると考えますが、なかなか家庭での環境が難しいとなると、何とか学校に足を運べないかと、私たちは考えたいところであります。

そこで、学校の空き教室等も活用していただき、少しでも登校できる場所、または学校で

不安を抱える子の居場所として入れるような部屋は、作っていただいていますし、小学校中学校でもどんどんそういった居場所づくりをしてくださっています。しかしながら、そこに常駐できる職員なり、大人なり、そういった方がいないということが問題になると思います。

やはりどんなところにおいても人材の必要性が問題になってきてしまう。

すばらしい環境づくりをしているが、残念ながらそこを十分に活用するための人材が確保できないという問題があり、とても深刻な現状でございます。誰一人残さない居場所には信頼できる人材を配置していかねばならない。これが、本質なのではないかと私は考えております。

学校現場でも、実際に教室を作って、空き時間のある教員を配置してくださっており、十分に全力を尽くして対応していただいているのですが、主な職務は学校全体の運営ならびに、教室の子どもたちにご指導いただくことであり、それどころではないような状況に陥っています。

教員の欠員は現在、大変深刻な問題であって、東京都においても深刻な状況であるということも十分理解してはいると思いますが、実際に子どもたちの話を聞いたり、学校訪問させていただいて現場を見てみると、やはり先生たちが現場で熱心に頑張ってくださっていて、子どもたちも担任の先生に対して絶大な信頼を寄せています。

そこで、いろいろな状況もあるのですが、突然担任の先生がいなくなってしまうケースがあります。そういったに、第二の親を失ったような、大きな心の衝撃を受けている子どもたちの状況を、何度か見てきております。

そうなってしまうと、今まで円滑にできていた学級活動もバランスが崩れてしまい、子どもたちは精神的に不安定になってしまいます。

特に、小学校3年生4年生ぐらいになりますと、自身の心も成長してきて、自我が確立されてくるもので、そこに、自分の意見を聞いてくれて、自分のことを信頼してくれる立場の担任の先生、周りの先生、それを取り巻く大人の方々が、突然いなくなってしまうとなると、心の損失が大きくなります。

これにより、クラスのバランスを乱してしまっ、不安の大きい児童は学校への足が遠のいてしまうという状況も見受けられます。

やはり何とか学校の教員、職員等の欠員を補いたいです。

これまで、心の不安を抱えている子どもたちにとっては、臨床心理士さん等の専門家にも介入していただき、少しでも心の支えになっていただきたいと思います。現状、難しいことは多々あるかと思えます。



そこで、先ほどもお話に出てきておりますが i C S ・地域ボランティア・PTA、といった方たちに、子どもたちの心に寄り添える、ただその場にいるという状態だけではなくて、実際の子どもたちの心に寄り添える協力を求めています。そこへ私が尽力できないかと思っております。

学生のボランティアの方にも多々いろいろな形で、ご協力いただいております。

こういった方たちは本当に将来ある方たちで、私たちが期待しているし、頼らなきゃならない人材であると思います。

でも、現状、猫の手も借りたいような状況でありますから、こういった方たちに、どうしてもこの不登校の児童の居場所に行ってもらえるようなことがあるかと思えます。しかし、私としては、将来教員を目指して夢を見て、次世代を担ってくれる、リードしてくれる志を持った若者ですから、できる限り、現場の先生が各所で活躍して輝いている場を見ていただき、学生らが教員になって、今後、板橋区の教育を引っ張っていくんだ、という気持ちになって欲しいと私は願っています。そのため、いきなり我々の抱えている問題の中核に、行ってもらおうというのはなかなか心苦しく思い、教員離れという考えを推進してしまうデメリットも考えられます。将来ある若者については、先を見据えて期待をし、よい刺激を与えられるような環境づくりを目指したいと思っております。

そうなってくると、やっぱり地域の人材発掘、i C S の協力、学校の情報発信などにより、各所の協力を得ながら、私たちは子どもたちの心に寄り添い、学校の楽しさ、この若い世代の時代を共に生き抜く楽しさを分かち合っていきたいと思えます。

以上です。

#### ○坂本区長

はい、ありがとうございました。

ただいま野田委員から貴重な発言ありがとうございました。

皆様からご意見ございましたら、どうぞお願いしたいと思います。

いかがでしょうか。

#### ○高野委員

1 学期の学校で子どもの見守りの支援のお手伝いをしたというお話を先ほどさせていただいたのですが、ボランティアするきっかけになったのは、コミュニティ・スクール委員会で、校長先生から学校の現状について、お話がありました。

その中で、ある学年で、子どもたちが大変でお手伝いがほしいということをおっしゃっていたので、そこで、何人か地域の人たちが、学校地域支援本部が音頭をとって、支援に当たることになりました。

その中で、私は一年生だったのですが、よかったなと思うのは、子どもたち一人ひとり

について、この子にはこういう指導をしていきたい。この子は、こういうことで困っているから、こういうふうに注意してほしいというようなことが、毎日ではないのですが、先生方の方からご指導いただきました。先生との綿密な打ち合わせとか、学校側からのご要望が、伝わることで、少しお力になれたのかなと思っています。

地域の中には、子どもたちのことをいつも心配している方がいっぱいいらっしゃいますので、学校からぜひ声を上げていただいて、そして、連携をとりながら、協力していきたいと思えます。

#### ○坂本区長

ありがとうございました。

他に委員さんからいかがでしょうか。

では、野田委員さんどうもありがとうございました。

次は最後になりますけども、中川教育長からご発言願います。

#### ○中川教育長

はい。ありがとうございます。

今回のテーマであります誰一人取り残さないための居場所づくりは、2025年度までの教育の板橋の実現に向けた4つの主要柱の一つとして取り上げている施策でございます。

ただいま坂本区長や教育委員の方々のご意見から、居場所について新たな視点や今後の取組の方向性、これまでの反省点や成果などを改めて認識することができました。

私からは、学校の現状と役割、社会教育施設の一層の活用、企業・大学・NPOを初め様々な主体との連携協働という三つについてお話をさせていただきます。

ここ数年の各種法律や答申を鑑みますと、子どもに関わる社会情勢の激変ぶりは明らかであると思っています。

例えば、いじめられたと感じた子どもを徹底的に守ることを趣旨としたいじめ防止対策推進法。障害のある人への合理的配慮の提供を義務づけた障害者差別解消法。不登校に学校復帰を最終目的としないことを明記した教育機会確保法。社会全体で子どもの意見を尊重することが明記された子ども基本法の制定。そして、中央教育審議会答申の令和の日本型学校教育のあり方の構築を目指して等など、子どもへの見方、考え方や学校教育のあり方そのものが変化を求められています。

その背景には、ダイバーシティ&インクルージョン、多様性を公平に包み込む一人ひとりの違いを大切にするという考えが敷衍されていると思っています。

これは、いわゆるダイバーシティエクスクルージョン、多様性を排除するという、同一性を乱すものを排除するという原理がまかり通っていることに対するアンチテーゼとして、提唱されているのではないのでしょうか。

具体的に言えば、頭髪や服装の指導、学習環境や生活規律の維持など異質なものを排除するのではなく、包摂することを単に頭の中で理解するだけでなく、現実世界の様々な中で実施するというのが、今、そしてこれからの学校教育に強く求められているように感じています。

実は今日、皆さんにご紹介したい絵本があります。

これは、バーバーパパの学校という絵本です。これはフランスの小学校の話なのですが、学級崩壊が起きている学級に保護者や市長が、お巡りさんをつけてでもいいので学校に縛りつけて勉強させないといけないと言い出すところからスタートします。

それを見兼ねたバーバーパパが、子どもたちを森の学校へ連れ出します。

バーバーパパには個性豊かな家族がいるので、子どもたちの好きなことに合わせて、いろいろなことを教えることができます。

歌を歌うのが好きな子ども、自然観察が好きな子ども、機械いじりが好きな子ども、みんなそれぞれ夢中になるものが違います。

好きになったことを突き詰めると、その先にわからないことがあっても、さらに知りたいと思えるのです。

その瞬間こそがまさに勉強したいと思う瞬間で、このときに学校の先生が戻ってくると、以前と同じ算数の授業をしたとしても、子どもたちの食いつき方が違ってきます。

そのような瞬間こそが子どもたちの学びの場なのです。

半信半疑だった保護者も市長も変化した子どもたちの姿を信じて、バーバーパパの学校に子どもたちを預けたいと思うようになりました。

最後はこんな言葉で締めくくっています。

『子どもたちは学校でたくさんのいろんなことを勉強しました。

だけど、何よりもすばらしいのは、みんなみんな楽しく幸せにやっているということです。』

このお話の中から私は、学校が大切にしてほしいことを感じておりました。

それは、あらゆる教育活動に、子ども自身に自己決定や自己選択する機会があるということです。

私は時間を見つけて区立小中学校や幼稚園をぶらっと訪問をしています。

そういう中で、すてきな学校、楽しい授業に共通していることは、学びの選択肢がたくさんあり、自己決定や自己選択の機会がある、子どもたちが活動を選ぶことができるということです。

学ぶ内容を選んでみたり、1人で学んでも友達と学んでも、先生と学んでもよかったり、オ

ープンスペースなど好きな場所で学ぶことができたり、学校の決まりを先生たちと一緒に自分たちでつくったりすることができる学校です。

自分で選ぶ決定するということによって、もちろん興味関心が満たされますし、無意識のうちに自己責任が生まれ、集中して取り組むようになる場面を数多く見てきました。

例えば、小学校 3 年生の算数の授業で、二等辺三角形から調べるか、正三角形が調べるか、どちらでもいいとの授業を見たことがあります。

子どもたちが自分で選んだ三角形を夢中になって調べていました。そしてその学びを次の三角形の学習に転移していました。

ある中学校では、標準服をそのままにするかいつそなくしてしまうかという、校長先生の提案に対して、アンケートを含めていろいろ検討し、保護者も巻き込んだの話を拡大したのですが、結果的には、生徒の思いとして存続することを校長先生に提案していました。

すべてではなく、どこかに自分たちの学びを自分たちで決められる。

自分たちの学校は自分たちでつくれるという手応えを子どもたちが持てる学校、そんな学校を板橋の中にたくさんつくっていききたいというのが、今の私の強い願いです。

そういう点から、実は区内の適応指導教室フレンドセンターについては、通常の学校に通えない子どもたちだからこそ、大人の決め事をするだけでなくし、当該の子どもたち一人一人の決め事による運営をするように伝えました。

制服もなくして、登校時刻もなくして、学びの設計図である時間割も先生と相談して自分で作る。

教科の学習以外にしたいこと、例えばイラストを書く、本を読む、ダンス踊るなどがあれば、プレイルームでそれに専念してもよいという選択肢がたくさんある居場所づくりをめざしています。

また地域の方のご理解ご協力で月に 1 度、昼食の提供もしていただくようになりました。

おかげさまで、通室する児童生徒がふえ、高校進学においても実績を残しているところです。

まさに学校に通えない子どもたちの居場所の一つになっています。

板橋区の広さからこういった施設の拡大を検討して参りたいと存じます。

しかし、こういった居場所をつくる際に、最も困難を伴うことがあります。

それは、子どもたちを何とか通常の学校生活に戻してあげたいという先生方や保護者大人の強い思いです。

それ故、学校生活のペースに馴染めない子どもたちを無理やり学校のペースにはめ込もうとする矛盾が子どもたちの心に重しとなってきますし、先生方・大人も思うようにならない

子どもたちへの対応に苦しくなってきます。

義務教育という言葉の中で、私たちが大切にせねばならないことは、子どもたちが持っている学習権を担保するということです。

子どもたちが学びたいと感じたときに、学んでいいという権利です。

本来、どの子どもにとっても、その場が所属する教室や学校であって欲しいわけですが、それがそうならない子どもたちがいるという現状を考えますと、私たちは、子どもたちが学びたいと思ったときに学べるような環境を用意すること、それは公教育において、学校内、学校外、そして学校内には、教室とは異なる子どもたちの落ちつける場所が置かれるということに繋がるように思います。

そういった1点で今、板橋区では学校内に、教室ではない「いきぬく」（生き抜く・息抜く場）としての子どもの居場所づくりを進めております。

本日発表いただいた板橋第五中学校のごっちゃんルームもその一つであります。

また校外においては、先ほど高野委員もお話がいただいたように、大原成増のまなぼーとのi-y-o-u-t-hにはダンスを楽しむ子どもたちが集い、練習するだけでなく、発表の場であるダンスフェスタを子どもたちの手で企画・立案、運営しています。

教育科学館では、冒頭、成増ヶ丘小学校のプレゼンにあったFLLの取組が、学校や年齢を超えた様々な子どもたちがチームをつくり、行われています。

プログラミングに興味関心のある子どもたちが集まる居場所として機能しているところです。

これは才能ある子どもたちへの特別な教育を施すギフテッド教育にもつながると思っています。

このように社会教育施設として、まなぼーとや教育科学館以外にも、区立図書館、郷土資料館など、社会教育施設の居場所としての活用について、現在どのような機能が発揮できるか検討しているところです。

これらについては、大人が考えたものを一方的に提供するレディメイドではなく、子どもたちの声を広く深くヒアリングしながら、ともに築き上げていくオーダーメイドの発想で進めていきたいと考えています。

最後は、企業・大学・NPOを初め様々な主体との連携協働についてです。

現在、大原では、NPOのLearning for Allさんと連携し、ゆったりとした時間を過ごしたい子どもたちのために、いろいろな相談に乗ってもらえるスタッフがいます。

子どもたちのための環境づくりに努め、安心安全な居場所として機能するとともに、ヤン

グケアラーや虐待の発見にも繋がっています。

スタッフは専門のスキル研修を行っており、高い資質を備えていらっしゃいます。

今後、ますますの連携を期待しているところです。

そして、私が以前から実は興味を抱いていることの一つに、「ファブラボ」(Fablab)というものがあります。

これは、かなづち、のこぎりから3Dプリンターやレーザーカッター電子工作ツールなどアナログからデジタルまで多様な工作機器が備えられた「街の図工室」というイメージです。

世界的なネットワークを持っており、都内にも、神田、大田、世田谷、品川にあります。

個人による自由なものづくりの可能性を広げ、「使うものを使う人自身が作る文化」を醸成することをめざしており、まずは教育科学館あたりに大学や企業との連携で設置していきたいというふうに思っています。

以上、様々お話ししてきましたが、SDGsの視点ともあわせ絡めて、子どもたち、区民の方々の居場所については、いろいろな可能性を秘めていることを、今日の会議を通して再認識しているところです。

今後、区長部局の各部各課とも連携協働しながら、よりよい居場所づくりに努めて参りたいと存じます。

以上でございます。

#### ○坂本区長

はい。ありがとうございました。

ただいまの中川教育長からの発表がありましたけれども、皆様からご意見、またご質問等ありましたらお願いと思います。

いかがでしょうか。

長沼委員お願いします。

#### ○長沼委員

教育長ありがとうございました。

お話の中で一番私が印象深かったのが、学習権という言葉が使われて、そしてお話をされたこと、確かに子ども目線でこの学習権を見た時には、ちょっと違った風景が見えてくるなと思いました、ややもすると、我々大人目線や法律が前提となって、もちろんそれは事実としてはそうなのです。

見方を変えると様々な可能性がまだまだあったということに気づきました。

一番極端な言い方をします。

もしかすると、学校制度というのは、今の学生が明治時代に始まったことですから、ひょっとしてその明治時代にやってきたことがこのままでいいのかという問い直しが、求めら

れているかもしれません。

今の教育長の話の伺って、そういったことを改めて議論しながら、もちろん法律の範囲内ではありますけれども、板橋区でできることを、学校教育、社会教育も進めていくってことが、我々に求められてるのだなと思って、今聞いていました。

それは何よりも子どもたちの居場所、子どもたちが自信を持って、生き生きと生きていくってことを目指していくっていうことをしっかりとやっていきたいなという決意であります。以上です。

#### ○坂本区長

はい、ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

私からすいません。多様性ってということなのですが、何かの番組で、宇宙飛行士の野口さんが、インタビューで今まで宇宙飛行士として宇宙ステーションに結構長くいて、1人の時もあったし、またはその準備を含めて、NASAとか世界中の科学者、宇宙飛行士と関わりを持ちながらチャレンジをしたという、非常に類まれな経験を持った方が、宇宙飛行士からは引退し、今後は違うステージということで、恐らく研究者としていろいろ研究をした中で、経験者として注目されると思うのですけど。

どうしてもこの多様性という中では、日本人ならではの認めるといいでしょうか。

そういったところをもっともっと寛容であるべきじゃないかと。多様性が重要じゃないかということをおっしゃっていたことが印象的でした。

違うことをするとどうしてもみんなになぜと言われたり、要はその意見を持つことから始まって、多様性っていうのは、違いの出発点だと思うのですね。

そういうのを、社会とか地域っていうところで、どうしても空気をすごく気にされることが強いんじゃないかということ野口さんのインタビューで聞きました。

一言言えば、もう少し鈍感っていうのはないですけど、そういう気持ち、寛容になるということが非常に、これは、世界中の方と付き合うときに、日本人は時間に厳しい、時間に非常に正しいところかというと、違う国であると30分遅れてくるとかですね。まあいいんだよ、今日ちょっと雨も降ってきたししょうがないよとですね多分そういうのはたくさんあると思うのですね。

文化とか経験の違いだけでなく、そういう違いみたいなところで、ただそれでいうと、許容範囲がどういうふうにあったかどうかということでは、違う才能を持った人と、非常に大事なことだと思います。

国際交流するときは、本当そういうものの連続で、時間通りってことがないのですね。

それも含めて、逆に彼らからすると、ちょっと細かすぎるんじゃないかなということなのですね。

それも、考えていくべきことかなと思っています。中川教育長の話聞きながら、野口宇宙飛行士の話から聞いたことを少しご紹介させていただきました。

他にいかがでしょうか。

長時間にわたりまして皆様、本当に今回も素晴らしい様々な意見と、また、委員さんの違う立場からいろいろとご意見、またはご提言も含めて頂戴をいたしました。

誠にありがとうございました。

今日の教育会議でありましたいろんな提言を含めて、今日、事務方の区長部局も含めて、教育委員会の各課もいらっしゃいますので、ぜひ、今日のお話を少しブレイクダウンしながら、施策の展開や見直しとまた新しいこの取組につなげていただきますように今日のヒントを活かしていただきますようによろしくお願ひしたいと思っております。

改めて、皆さん本当に長時間お疲れ様でございました。

予定時間をちょっと回ってしまったのですが、本日、皆様と共有をいたしました課題或いは方向性については、板橋区全体としてはどんな施策ができるのかを考えて、頭の中がちょっと熱くなって、心が熱いうちに、今のイメージを形にするようお願いしたいと思っております。

今後とも区長部局と教育委員会がより緊密に連携・協働しながら区民一人ひとりの可能性とチャンスを広げる学習の場と機会が提供できるように、取組を進めていきたいと考えております。

教育委員の皆さんにおかれましては、より一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

改めて、皆様お忙しいところ、またお足元の悪いなか、お集まりいただきまして、誠にありがとうございました。

これをもちまして、令和4年度板橋区総合教育会議を閉会といたします。

皆さんありがとうございました。